

書評 蛭原一平・齋藤暖生・生方史数 編

## 森林と文化

—森とともに生きる民俗知のゆくえ—

山本 信次 (岩手大学)

## 1. はじめに

本書は「森林の変容とそれをもたらしたさまざまな動因、さらにそれらが人間社会に与えた影響とをダイナミックにとらえ、若手研究者による最新の研究成果を紹介することによって、森林に関する理解を深めることを目的」に編まれた、全13巻を予定する、森林科学シリーズの第12巻である。生態学や物質循環など比較的自然科学の内容が色濃いシリーズ中において、第13巻に予定される『グローバル森林管理における市場メカニズムの拡大と地域住民』とならび、人文科学・社会科学の色彩の強い巻であるといえよう。

さて本書で使われるところの「文化」という用語と森林との関連に関して考えれば、国連主導で行われたミレニアム生態系評価において、生態系サービスの一つとして「文化的サービス」という分類が用いられたことが思い起こされる。従来からの供給サービスとりわけ食糧・原料供給の場、あるいは調節サービスすなわち公益的機能発揮の場、さらには生息・生育地サービスとしての豊かな自然環境といった認識に加え、自然生態系や森林の価値として「文化」という人間と自然との関係性そのものをサービスとしてとらえ、その存在と重要性が世界的な文脈で認められたことは大きな意味を持つものといえよう。

ただし、文化的サービスを細分化した例示としては、自然景観の保全、レクリエーションや観光の場と機会、文化・芸術・デザインへのインスピレーション、神秘的体験、科学や教育に関する知識が挙げられており、神秘的体験を除き、きわめて「近代的なまなざし」が色濃い。それゆえ本書の副題に挙げられた「民俗知」にみられるような森とともに暮らす人々が生存するための食糧や原材料を持続的に調達するための「知」や技能は「文

化的サービス」に含まれず、ミレニアム生態系評価の枠組みでは、それらは「供給サービス」として位置づけられる。しかしながら供給サービスの枠組みにおいては、近代的・産業的商品生産と伝統的自然資源利用に基づく自給的な食糧・原料獲得は区別されていないことから、「民俗知」の存在が「文化」的には不可視化されてしまうことになる。

本書の編者・著者らは本書における「文化」を、こうしたミレニアム生態系評価の分類にとらわれず、いわゆる文化的サービスに加えて、諸外国先住民あるいは我が国の農山村における伝統的な森林利用に基づく自給・マイナーサブシステムの食糧・原料確保あるいは前・半近代的な商品生産などにまつわる「知」や技能までを含んだものとして議論を展開しており、より適切に感じられる。

以下、その内容についてみていきたい。

## 2. 本書の概観

本書の構成は以下になっている。

## 第1章 森とともに生きる人々の文化と民俗知

## 第1部 民俗知を知る 熱帯と冷帯に暮らす森の民の事例から

## 第2章 民俗知と科学知：カメルーンの狩猟採集民バカの民俗知はどのように語られてきたか

## 第3章 森林環境問題と住民の森林観：なぜブナンは森林を守るのか

## 第4章 熱帯林ガバナンスの「進展」と民俗知

## 第5章 近代化と知識変容：カナダ先住民の「知識」をめぐる議論と実践

## 第2部 民俗知をつなぐ 国内山村の事例

- から
- 第6章 和紙原料栽培の民俗知から見る  
新たな森林像
  - 第7章 山を知る：森とともに生きるマ  
タギたちの民俗知
  - 第8章 ありふれた資源をめぐる民俗知：  
山菜・キノコをめぐる民俗知と  
その現代的意義
  - 第9章 保護地域を活用した地域振興や  
山村文化保全の可能性
- 第3部 民俗知のゆくえ まとめにかえて
- 第10章 民俗知のゆくえと現代社会

以上の通り、本書は三部構成をとるが、その序章に当たる第1章において本書における「森林文化」が定義され、その太宗をなす民俗知に注目するゆえんが説明される。現代の自然資源管理のあり方は、生態学を中心とした近代的な自然科学に基づき議論されることが多い。しかし科学知そのものは、科学技術社会論における「科学に問うことはできても、科学がこたえることができない問題としてのトランスサイエンス問題」の典型として、唯一の正解としてのあるべき自然資源管理像を提示できない。そうした状況に対応するための、自然資源管理へのオルタナティブな接近方法としての民俗知に期待するものといえる。さらに民俗知の活用は、社会的に弱い立場に追いやられがちであった先住民の自然資源管理の意思決定への参加を保障する点からも社会的公正を担保するものとして意義づけられる。

こうした民俗知の重要性を前提に、第1部では海外事例の紹介を行いつつ、民俗知がどのように生態系保全の議論に取り入れられてきたのか、独自の民俗知を持つ先住民が他民族や外部者とどのように協働し環境保全活動を行ってきたのか、さらに、そうした「協働」の中で、逆説的ではあるが統合的で多面的であるからこそ意味を持つ民俗知が、環境保全という近代的で普遍的な価値の実現のために都合の良い部分だけに矮小化される「保全のシンプリフィケーション（単純化）」の問題が続けて議論される。この問題は本書

の核心ともいえる議論であり、のちに詳述したい。また、こうした問題を抱えつつも存続してきた民俗知が、更なる近代化の進展により失われてゆく状況を打破するために外部者が果たせる役割などが議論される。

第2部では国内山村に事例をうつし、和紙の生産を切り口に、木材生産のための林業にとどまらない多様な山の生業とそれらを統合的に把握する民俗知の存在を明らかにし、同様にマタギたちのそうした民俗知としての「知識」が、単に「知っている」ということではなく「そこに生きること」と不可分に結びついていることが示される。またキノコや山菜の採集を切り口に、そうした民俗知が狭い意味での「生存」のための知識にとどまらず「たのしみ」を含んだ豊かさを持つものであることを示しつつ、それを国内の「辺境」としての山村振興につなげるための方向性が示唆される。それをうけて、ローカルな森とともに生きる人々の視点からみてきたこれまでの論考とは反対方向から、近代的な制度としての保護地域に指定された「豊かな自然」が、こうした地域住民の知識や慣習を含んだ形でいかに観光商品として「資源化」され、消費されてきたのかを示し、近年の「自己責任論」的風潮に応える形での農山漁村の自助努力による観光振興への過度な期待を戒める論考がなされる。

そして第3部の第10章において、総括的議論として民俗知の持つ可能性とその活用における留意点が議論され、本書は幕を閉じる。

### 3. 若干の議論とまとめ

先述したように、本書の核心の議論の一つとして、著者の一人である笹岡正俊がいうところの「保全のシンプリフィケーション」がある。それは、外部者が「希少種の保護や生物多様性の保全という普遍的な価値の実現のために、ローカルな文脈に埋め込まれていた複雑で多面的な人と自然のかかわりに介入し、そうしたかかわりあいをより制御しやすい形に一元化・規格化し、再構成していく作用」のこととされる。

民俗知が科学知に比して、無視、蔑視されてきた状況から再評価・活用されるようになった状況は喜ぶべきことではある。しかし、そうした中で、ローカルで統合的な民俗知は細分化されてしまう。細分化ゆえの普遍性を有する科学知と異なり、民俗知はローカルな文脈の中でこそ意味を持つ場合もある。先住民のなす「伝統的な環境保全的行動」は、彼らの環境保全的な意識の高さを示す場合もあろうが、ローカルな社会における他者への威信や信仰を示す行動であるかもしれない。それを一方的に「環境保全」として賞賛し、先住民を「天性のエコロジスト」としてもてはやすような、外部者から見た都合の良い部分の「切り取り」は厳に戒められるべきことが本書では繰り返し語られる。

同様に著者の柴崎茂光は、「生産」や「信仰」、「生態系・景観」といった多様な価値を有していたローカルな自然資源が、近代的な制度としての保護地域に指定されると、時間が経過するとともに、その価値認識が「生態系・景観」だけに収斂していくといった「価値の単純化」にみまわれ、そのことが多様なローカルな自然資源利用を阻害し、逆に豊かな民俗知の消失を招くことを指摘している。

そうした「切り取り」や「単純化」は、民俗知を科学知の従属的補完物に貶め、むしろ森とともに暮らす人々の実像を見誤らせ、ローカルな自然資源利用の実態把握を妨げ、その保全方向を見誤らせることにつながるだろう。

本書を通じて、民俗知は単純に科学知を補完するものではなく、近代的な科学知とは異なるオルタナティブでローカルな自然への向き合い方を示す存在であり、科学知と並置し

てその場所における「あるべき自然やその利用」について考え、グローバルな価値観とローカルな価値観を並立させ得る自然資源ガバナンスを実現し、森とともにある暮らしを再強化するために不可欠な存在であることが理解できた。

林野庁は現在、目玉政策として「森林サービス産業」を推進しつつある。条件不利地域の振興策として、木材生産にとどまらない森林利用として「サービス産業」化を図ることそのものは評価できる。その一方でローカルな文脈から離れた、外部者による「切り取り」的に「単純化」された「観光資源」化には、本書で繰り返し指摘された通り十分留意する必要があるだろう。

本書は、これ以外にも示唆に富む論考が多く、大変刺激的であった。強いて難を言えば、書名と本書の位置づけからすれば、いわゆる生態系サービスとしての文化的サービスに関わる議論ももう少し欲しかったように感じる部分もないではない。しかし幅広い森林科学全体に関わるシリーズ中ではボリューム的に難しいことも十分理解できる。むしろ本書の出版を機に、そうした「森林文化」的な議論が活発化し、本書でふれられなかった部分を埋めていく作業が、森林に関わる人文・社会科学研究者には求められているといえるだろう。本書は、いわゆる林学系の研究者のみならず、人類学など隣接他分野の研究者の参加によって厚みのある論考を実現している。今後ともこうしたコラボレーションが進むことを切に願うものである。

ぜひ一読をお勧めしたい。

(共立出版、2019年5月、306頁、3,700円+税)